

アメリカ・Vassar College

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
生駒有紀

2012年晩夏、新学期よりも一足先にヴァッサー大学留学生オリエンテーションウィークが始まりました。世界中から集まった80人のうちほとんどは一年生で、私のような交換留学生は約10名、日本人はひとり。どきどきの初日、私はまわりのネイティブ並の英語力に途方に暮れました。会話は速くて半分何を言っているのかわからない。圧倒されっぱなしで夜寮の部屋に帰ればはじめての生活に慣れないことも多く、親切な先輩はついてくれましたが、何をするにも隣部屋の女の子とともに手探りでした。一週間のオリエンテーションが進むにつれたくさんの人と話す機会があり、不安なのはみんな一緒だと気付いてだんだん安心できました。

ディスカッション型の講義では人の意見を聴いてレスポンスすることが基本です。臨機応変に進む授業に、ときに100ページ以上にも上る予習の読書量。教授陣はみんな親切で英語のレベルは気にしないとおっしゃってくださりほっとしましたが、ごはんや校内イベントに誘われても勉強があるからと部屋にこもることも多く、それでも課題を消費しきれないことに力不足を実感する日々でした。そんなときに「ホスト(ヴァッサーの先生や職員が留学生一人一人についてくれるのです)との懇親会ディナー」がありました。私のホストはベスさんという方で、この人と出会えたことは本当に幸運でした。ベスさんは「あなたは勉強だけをしにここへ来たわけではないでしょう、もっと楽しんだらいいのよ」と言って、スタディー・アドバイザーを紹介してくれました。

秋が深まるころにはレポートでAをもらった授業でほめられることも出てきて、寮の友達と夜遅くまでカフェで話したり、週末にバスで

遠出して遊びに行く余裕も出てきました。しかし調子づいていたある日、教育の授業でグループ会議をした際、私はメンバーの議論についていくのに必死で自分の意見を言えず討論に貢献できないまま解散になってしまいました。少し成長できたと思っていたのにまだまだ未熟な自分が悔しくて涙が出てきました。母親にそのことを話すと、現地の子と対等に話せなくて当たり前だと思うのではなく、悔しいと感じることができた私のことを誇りに思うと励ましてくれました。もともと両親は私の留学に反対で、特に心配性の母にはわがままを押し通す形でアメリカに来たのにも関わらず、絶えず私を気にかけて惜しみない愛情を注いでくれる親の大きさを知り、自分がまだまだ自立できていないと痛感しました。また私よりも英語が数段できる他の留学生の友達も国内生との間には討論の際などに実力の差を感じていると聞き、私ももっと頑張ろうと思うことができました。

帰国から3ヶ月経った今も目を閉じれば泣き笑いた日々が鮮やかに浮かびます。きっとこれからもVassarでの思い出は色褪せることなく私に勇気を与え続けてくれると思います。

